Japan Society for Southeast Asian History

第五セッション

Patrizia Carioti　"Diplomacy、Piracy、Commerce: Some Notes on Kan-ho System (Seals Trade)、XV-XVI Centuries"

永積洋子　"The Vermilion Seal Maritime Trade in Taiwan"

第六セッション

莊国土　「論十一至十九世紀初海外華商経貿網路的形成和発展」

陳國棟　「十七世紀初期東亜貿易中的中国綿布ーCangan與台湾」

第七セッション

Jose Eugenio Borao Mateo　"Fleets、Relief Ships and Trade - The Communication between Taiwan and the Philippines (16726-1642)"

J. Huber　"Relations between Zheng Chenggong and the Netherlands East India Company from 1650 to 1655"

第八セッション

康培徳　「荷蘭時代西拉雅大型聚落で可能成因」

翁佳音　「近代初期的台湾風雲」

二日目の晩餐では、曹永和先生の誕生を祝う宴会となり和やかに進んだ。また、翌日から一泊二日で台南へのオプショナルツアーが企画された。

この学会で発表された論文は、近々オランダから刊行される予定である。

また、ブリュッセ博士が編集していた"Dagregister te Zeelandia"(『ゼーランディア城日誌』)の第四巻がこの学会でお披露目され、これにより『ゼーランディア城日誌』は全巻刊行されたことになる。今後のシナ海貿易の研究にはきわめて有益な資料が揃ったことになる。これは、当然オランダ語で書かれているわけであるが、台湾の江樹生先生が、中国語訳を刊行しており、現在第一巻が出版されている。(江樹生譯註『熱蘭遮城日誌』第一冊、台南市政府、２０００)

日本マレーシア研究会(JAMS)について

左右田直規(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)

日本マレーシア研究会は、マレーシアに関する研究と交流のネットワークの拠点として、1992年に設立された。前身は、1987年にマレーシア研究留学中の若手研究者によって立ち上げられた勉強会である。

現在、年に一度、総会を開催するとともに、年に一、二度、研究会例会および関西例会を催している。そのほか、不定期ではあるが、会員以外に開かれた公開セミナーを主催してきた。年に二、三回発行される会報は、研究会やシンポジウムの情報、マレーシア研究の出版物の紹介や書評、資料紹介、研究ノートなどを掲載している。

1992年の設立当初25名を数えた会員数は、現在では130名以上にのぼっている。会員の大多数を占める研究者(教官、学生など)の専門分野は、人類学、社会学、歴史学、地理学、文学、政治学、経済学、農学、地域研究などと多岐に渡っている。また、少数ではあるが、マレーシアに関わりをもつ企業や団体に所属する会員を含んでいる。

2000年の主な活動をまとめてみたい。まず、研究会例会が、3月24日に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「東南アジア島嶼部における人の移動」プロジェクトとの

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Southeast Asian History

合同研究会として開催された。先住民族の「文化」の表出と表象に関して、信田敏宏「オラン・アスリのラター」および奥野克巳「イバン女性と銀の首飾り——需給の歴史と表象の誕生」の二本の興味深い報告がなされた。続いて、関西例会が、10月31日に、京都大学東南アジア研究センターとの共催で開かれた。Shamsul A.B. "From 'Malay Studies' to 'Malay World Studies': An Invitation to a Rethinking" が発表され、地域研究としての「マレー世界研究」の可能性と問題に関して活発な議論が展開された。

総会は、12月9日に兵庫県城崎町にて開催された。報告は、奥村育栄「タミル語学校の現状と課題をめぐる試論」、金沢謙太郎「生物多様性消失のポリティカル・エコロジー——サラワク、バラム河流域のプラン集落の事例から」、綱島(三宅)郁子「半島マレーシアにおけるキリスト教とマレー(シア)語の関係——禁止用語に関する州法をめぐって」、左右田直規「『マレー世界』像の伝達・受容・再編成——英領マラヤにおけるマレー民族主義の思想的基礎」の四本であり、それぞれ、マイノリティ教育の問題点、地域社会と生態の変容、言語と宗教の関係をめぐる権力の介入、ならびに民族概念の形成史に関する話題を提供した。

本研究会が、設立後9年間にわたり、マレーシア研究者に専門分野や世代を越えた定期的な交流の場を提供し、大学院生ら若手を中心とする研究者に貴重な報告の機会を与えてきたことは評価されるべきだろう。さらに、日本滞在中のマレーシア人研究者を研究会に招くことを通じて、日マ両国の研究者の交流に一定の功績を果たしてきたことも見逃せない。研究会の設立と運営に尽力された諸先輩方に敬意を表したい。

他方、本研究会を日本のマレーシア研究者にとって真に有意義なフォーラムとして機能させるためには、いくつかの課題を克服する必要がある。以下は筆者の私見であるが、諸点を指摘しておきたい。

第一は、総会ならびに研究例会における研究報告と議論の充実である。総会や例会を通じて、参加者相互の親睦や交流は着実に深まっているものの、研究会での議論は必ずしも緊張感のある刺激に満ちたものになっていない。本研究会をより魅力的なものとするためには、マレーシア研究の最前線を反映する挑戦的な研究報告と活発な討論が不可欠である。さらに、マレーシア研究の共通の課題や視角を模索、発見するために、例会だけでなく総会についても、個別の自由報告以外に共通論題を設定するなどの工夫が必要かもしれない。

第二は、非会員、およびマレーシア研究者以外の研究者との交流の拡大である。マレーシア研究の蛸壺化を防ぐためにも、より開放的な研究会にすることが望ましい。例会や総会の情報を会員やマレーシア研究者以外にも積極的に提供し、知的交流の枠を広げていくことが必要である。また、他地域の研究者を報告者として招き、地域間比較の視座を取り入れることも検討されてよいだろう。

第三は、会報の充実である。研究会の案内や報告要旨の掲載に加えて、マレーシア研究の動向や会員の研究成果についての情報交換という、本来期待されてきたもうひとつの役割を果たせるように内容の見直しを図る必要がある。

第四は、ネットワーク作りのための技術的整備である。現在、会員のメーリングリストの整備に向けての試みが進められている。整備が進み次第、メーリングリストを通じて、研究会などの案内をより迅速かつ簡便に行うことができるだろう。

このような課題に取り組むうえで、筆者を含む、これまで研究会で発表の機会を与えられてきた若手研究者が、今度は運営面でも貢献することが求められているといえよう。

NII-Electronic Library Service